

言葉に依らない援助の可能性

著：渡辺修宏

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

～前回までの内容～

筆者がソーシャルワーカーとして未熟だった頃に出会った、成人男性 A さん。

A さんには、就労する意欲が全くなかった。それがゆえ、近いうちに、公的扶助である生活保護制度を活用しようとしていた。

多くの関係者の説明・説得を経ても話は平行線のままで、A さんの気持ちは変わらなかった。そんな A さんとの関わりによって、筆者が理解していた「公的扶助の意義・趣旨・理念」が揺さぶられるのであった…。

A さんの幸せ

「働いて生きる」、「自立して生きる」という意欲がない A さんは、近い将来の生活保護受給を希望していた。A さんの両親はご健在で、比較的裕福な家庭であったのだが、そのご家族も、「実家をでて単身生活をする、生活保護を受給して、一人で生きていく」という A さんの希望をそのままに、尊重すると意思表示していた。

前回にも記したが、ここで改めて、A さんの強い意志を以下にまとめるので、その内容を確認したい。

- 1 私は精神障害者だ。ちゃんと診断名もついている。
- 2 就労して、社会で生きていくことに、私はとても耐えられない。
- 3 家族と一緒に住み続けることに、私はとても耐えられない。
- 4 生活保護受給は、権利であるから、なんら問題ない。
- 5 生活保護受給をしながら、TV をみたり、ゲームをして、人生を謳歌したい。

以上が、A さんの考えというか、生き方であった。そんな A さんの考え方に、それこそ以前はご家族を筆頭に、再考を促すかわりが散々繰り返されてきていた。しかし A さんの気持ちは変わらずであった。

言わずもがな A さんには、十分、就労できるレベルにあるという評価がすでに出ていた。四肢および体幹は健全、言語に基づく意志疎通も当然良好であり、精神疾患の陽性・陰性症状もほとんどみられないので、周囲の理解を得られればなんら問題なく、就労・自活生活できると見込まれていたのである。ただ、そのように頑張ろうという気持ちだけが、なかったのである。

もし、本当に A さんが生活保護受給となり、本当に「TV をみたり、ゲームをして」人生を全うできるのならば、それはそれで、いわゆる「幸せ」なことかもしれない。「幸せ」であるならば、誰がそれを「よくないこと」と否定できるのだろうか。「好きなことをして生きたい」と願うことや、そしてそれが「叶うこと」は、多くの方々も同じように求めることなのではないだろうか。

しかしその一方で、一定の年齢になって、一定の教育や訓練を経れば、地域や社会の維持や発展にかかわる役割が求められるのもまた、多くの方々が当然と考えることである。つまりそれは就労や家事などのことであるが、そういったことを皆が果たさなければ、私たちの今日の社会は、成り立たなくなってしまうだろう。まして、その役割を果たせるだろう技能、能力、才能、機会などが、それなりがあるとみなされれば、なおさらである。そして A さんには、それらがあるのである。

言葉を使わない、A さんへの支援

A さんにかかわる援助職者のミッションは、A さんの「幸せの実現」や、「自分らしい生き方の実現」であるといえる。しかしそれを、速やかで円滑な「生活保護受給の実現」であるといつては、あまりにも安直である。むしろ、生活保護を受給しないでも、「生きていけると思える意欲」を A さんに喚起してもらうことのほうが、より望ましい援助目標といえるだろう。

だが、これまでの取り組みにおいて、そのようなミッションはすべて失敗してきたようである。いろいろな方々が、いろいろな表現を用いて、A さんに語りかけてきて、ついにはそのように、思っただけでなかったから、今があるのである。相談、説得、情報提供、促し。時には、脅しや説教もあったかもしれない。数えきれないかわりを経て、A さんの今の気持ちが固まっているのである。正確なことはわからなかったが、10 年以上に渡ってそのような働きかけがなされてきたようであった。

10 年を経て、最近出会ったばかりの私が、いったい A さんに何を言えば良いのだろうか。いったい何を、投げかけられるというのだろうか。まさに私は、A さんに語る言葉をほとんどみつけられずにいたのであった。

文字通り、語り掛ける言葉がみつからなかった。A さんに対する願いとか思いとか、希望とか可能性とか祈りとか、言葉にならない何かは沸々とわいてくるのに、それらを言葉に紡ぎ合わせて言い表すことだけが、できなかったのである。

そこで私は、言葉を使って A さんと向き合うことを、あきらめた。あれこれ言うのではなく、その代わりに A さんに、「よかったら、みてみませんか？」と、いくつかの映画をおすすめすることにしたのであった。

A さんに紹介した映画は 10 本弱であった。本連載でも以前登場した、「レナードの朝」や「ペイフォワード」など、ひとたび視聴しはじめればすぐにのめりこめるような作品を集めて、そしてその中から A さんに選んでもらって、実際に A さんが視聴できる環境を整えた。うろおぼえだが、確か「ショーシャンクの空に」、「アカシアの道」など、洋画・邦画を問わずに集めたと思う。「なにをもってしてその作品を選んだのか」と問われると、うまく答えられない。ただ、感覚的に、A さんに見てもらいたいと思って集めた作品であり、ついでに、自分ももう一度見てみようとおもった作品なのである。そう、私も A さんと一緒に、映画を見たのである。つまり、向かい合って語るのではなく、横並びで同じものをみる、というかわりを展開したのである。

映画をみて感じる世界

A さんと一緒に映画をみる途中、あるいは見終わった後に、A さんが何を感じたのか、何を思ったのかについて、あえて聞くことはしなかった。A さんも、「なぜ、この映画をすすめてきたのですか」と、尋ねてくることはなかった。ただ、映画の内容に感動したのか、面白かったのかは明らかではないが、「他のおすすめの映画はなんですか？」と、次の作品を知りたがってきた。そういったこともあって、映画鑑賞は順調に進んでいった。

以降、日を開けて、時々、A さんと私は映画をみる時間を共有した。この、A さんと一緒に映画をみる時間は、私にとって、「考える時間」にもなった。A さんに立場になって考えよう、彼を理解しようとしながら、その上で、現在の状況で自分は何をすべきなのか、何ができるのかと、模索する時間になっていたのである。

そういった日々が数週間続いた後、ある日、思いもよらない変化が訪れた。これまでに一緒にいくつかの映画をみてきた A さんが私に、今までにないような落ち着いた口調で、次のように話しかけてきたのだ。

「渡辺さん」

「・・・なんですか？」

「あのですね・・・。働いてみる、っていう手も、ありかもしれませんね・・・。」

「！」

私は絶句した。まさか A さんがそんなことを言い出すなんて、まったく予想していなかったからである。

その後

その日以後、紆余曲線、二転三転があったものの、Aさんは就労する。つまり、生活保護の申請はしなかったのである。正確には、「申請を先延ばしして、とりあえず働いてみる」という生き方を、Aさんは選んだのである。

就労したものの、「疲れた」と言っただけで仕事を休んだり、「自分には仕事が向いてない」とぼやくことがよくあったが、幸い、その職場の上司に理解があった。Aさんは、すぐには仕事を辞めなかった。

それにしても、Aさんが働こうと心変わりした理由は、いったんなんだったのだろうか。映画を紹介しておいて私がこういうのも変な話だが、そして、まったくもってお恥ずかしい限りだが、私には正直、Aの気持ちの変化の理由がよくわからなかった。どんな映画が、あるいはどのようなシーンが、Aさんにどのようなメッセージを発信して、Aさんにどのような気持ちを創造させたのか、まったく見当がつかなかった。

でも、わからなくてもよいと、私は思っている。あの時も、今も。

それよりも、Aさんがそう変わってくれたことが尊いと感じている。援助者の恣意的な働きかけによってそのような結果に至れば、もちろんそれはそれで良いのだが、「よくわからないけど、よい結果になった」ということもあるのだろうと思う。そんな偶然性に期待するような援助を肯定しては、多くの関係者に対して失礼かもしれないが、私はAさんとのかかわりを通して、「どうしていいかわからないから、ともに学ぶ」を経験したと思っている。そう、映画という教材を使って。

「よくわからない」けど、「よくわからないこと」をして、「よくわからない結果」になった事例など、一般的に、人に話すことではないのかもしれない。そういった意味で、本稿に対する多様な批判が、あちこちからあがってもおかしくない。そうとなれば、甘んじて受ける覚悟である。ただ、恥を上塗りしながら告白を続けることを許していただけるのならば、次のことも合わせて記したい。

私がAさんと最後にあってからもう、かなりの時間が経っているが、今になって私がAさんとかかわりをここで述べたのは、援助者として、「わからないことは、わからない」と認めたかったからである。それは、「わからないことを、わかろうとしない」という意味ではなく、「わからないことを、わかったふうにしなさい」と宣言である。

人を支える、人を助けるって本当に、複雑で、不可解で、簡単ではない。にもかかわらず、あれこれ経験を積んでいくと、時々、「あまりわかっていないのに」、「なんとなくわかったような気になる」ことがある。そして、そんな自分を認めないまましていると、「なんとなくわかったような気がする」ことが、どんどん増えていく。だから自分が怖い。

リポートを忘れた援助者には、なりたくない。そんな思いで、本稿を上梓する。本稿を最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

—つづく—